

## ■特集 ■ 短歌の読み方

# 〈総論〉「読み」とは何か？

藤島秀憲

〈読み〉について考えるとき、まず押さえておきたいのが佐佐木幸綱の文章である。

短歌という文字どおり短い歌は、作品自体で完結することはできない。読者とめぐり合い、読者といわば共犯関係をむすぶことではじめて完成される。〈読み〉の参加をえて、短歌は完結するのである。

（佐佐木幸綱編著『短歌名言辞典』一九九七年 東京書籍）

〈読み〉は作品と共犯関係をむすぶこと、なんともスリリングな表現である。そこで私は願う。どうせ共犯になるんだつたらコソ泥でなく、世間をあつと言わせるような大掛かりな犯罪の共犯者になりたい。もつともコソ泥に共犯者は必要ない。作品自体で自己完結してしまう、読み応えのない短歌とは共犯関係をむすぶなくても良さそうだ。

幸綱の〈読み〉については別の筆者が書くので深入りしないでおくが、もう一つ、次の発言には触れておきたい。

歌人・塚本邦雄は、ふつうの歌人がまず手探りの作歌から入るのはちがって徹底した読みから短歌の現場に入ったのだろうと私は見る。

（佐佐木幸綱「私の前衛短歌体験」塚本邦雄展―現代短歌の開拓者―図録 二〇一六年 日本現代詩歌文学館）

〈読み〉と作歌は無関係ではないということである。塚本は極端な例としても、作歌と〈読み〉は車の両輪によく喩えられる。言い換えれば、歌を読めない歌人は歌を作れない歌人である。推敲は自作を読む行為に他ならないのだから。

〈読み〉とは残された三十一音を手掛かりに、短い詩型ゆえに省略された諸々を修復してゆく作業である。修復に手間取るこ

ともある。よく知られる例を挙げれば、若山牧水『海の声』の「白鳥は哀しからずや空の青海のあえにも染まずただよふ」。白鳥は海に浮いているのか、空を飛んでいるのか、一羽なのか、何羽かいるのか、人それぞれに読みが分れる。読みの決め手がないのである。このことについて伊藤一彦は、

自由に解釈できる余地を残しているところがこの歌のもち味であろう。

伊藤一彦「若山牧水」の項より『現代短歌大辞典』二〇〇〇年 三省堂

と書いている。ときにより修復作業では自由な解釈をしても良いようだ。

「読み」について書かれている文章をもう少し引用してみよう。

俳句や短歌が詩として成り立っているのは、作者が発した「わずかな」情報を読者の中で膨らんで、読者を感動さ